

『今月の天候と農作業』

通巻第5548号
10月号
平成24年10月5日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

【概要】

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

＜1週目の予報＞ 10月6日(土)～10月12日(金)

天気は、気圧の谷の影響で曇る日がありますが、高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率50%です。

＜2週目の予報＞ 10月13日(土)～10月19日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

＜3週目から4週目の予報＞ 10月20日(土)～11月2日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆普通期水稻

今月は稲刈りなどで農繁期となり、コンバインなどの大型機械をはじめ、草刈り機などを扱う事も多くなります。例年農作業事故が発生していますので、農作業の前には、機械類はもとより農道や路肩、ほ場入口の点検や整備を実施し、ゆとりのある作業計画に心がけ、事故防止に努めましょう。

1 適期収穫

ヒノヒカリでは収穫作業が始まりましたが、収穫適期は全籾数の8割程度が黄化したときで、水田ごとに籾色をよく観察し収穫しましょう。倒伏したところでは茶米や穂発芽等が発生している場合がありますので、刈り分けを行い全体の品質が低下しないよう努めましょう。大雨や台風などで水田にゴミが流入していると、収穫機械の故障などトラブルが発生しますので予め除去しましょう。熟期の遅いまいひかりの収穫は今月下旬となりますので、収穫5日前までは間断かん水で根の活性を保ちます。

2 適正な乾燥調整

出荷時の望ましい玄米水分は14.5～15.0%です。急激な乾燥をせず熱風温度40度以下の適正な乾燥を行いましょう。

◆大豆

1 排水対策等

子実肥大期にあります。ほ場内に水が溜まらないよう排水溝を整備しましょう。逆に晴天が続き干ばつが心配される場合は、子実が十分肥大しないことがあります。畦間に走り水を行い、品質の良い大豆を生産しましょう。

2 病虫害防除

一部でカメムシとハスモンヨトウの被害が見られます。カメムシの加害が激しいと、莢の肥大が停止し、株は収穫時期になっても青立ちのままとなります。ほ場を観察し遅れないよう防除を行います。

◆そば

今年は播種直後の台風被害により、株数の減少がみられます。今後、子実が肥大しますので、引き続き排水対策を徹底します。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆共通事項

急な冷え込みに備え、暖房機の整備・点検を行うとともにダクトの設置など、いつでも稼動可能な状態にします。またハウス内の二重ビニルの被覆が終わっていないほ場では、早目に作業を終え、いつでも保温ができるようしっかり準備を行いましょう。

暖房用燃料の節減には、ハウス内の気密性を高めることが重要となってきます。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認を行いましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期、側枝の発生から収穫期となります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行うとともに主枝の摘芯が遅れないよう注意します。

追肥は、生育が順調な時期から行いますが、1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょう。また、光線の透過を良くするために、主枝の摘心後より中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。苗床では、徒長しないよう昼間十分光りにあて、本葉2.5枚以降は昼温25℃前後、夜間は14度を下限に管理します。

◆ピーマン

促成ピーマンは定植から整枝・誘引期になります。この段階での枝づくりが年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意を要します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、ねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限した管理を行っていますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安

にかん水、追肥を開始します。かん水は草勢を見ながら行いますが、かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失さないよう注意してください。

◆いちご

今年は、9月の定植以降、いちごの花芽分化に適した気温で推移しており、頂花房の発蕾は10日前後が予想され、同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、遅れないようマルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。追肥は10a当たり窒素成分で0.3～0.5kg/日を液肥で施用します。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆キャベツ・レタス

キャベツは、は種後120日から150日で収穫期を迎えるため、結球具合をみながら随時収穫しましょう。

レタスは、12月出荷の定植期にあたり、2～3月出荷のは種期となります。生育適温は15℃から20℃ですので、本ほでは12月上旬にはトンネル被覆が必要となります。

◆たまねぎ

翌春3月以降に出荷する作型のは種期となります。播種床には、10㎡当たり完熟堆肥40kg、苦土石灰1.5kg、低度化成2kg程度を施用し、遅くとも中旬までには、は種してください。

◆しょうが

降霜の前に収穫することが必要となるため、霜の早い地区では下旬頃から収穫期に入ります。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

◆食用かんしょ

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると、過肥大によりいもの形や皮色が悪くなりますので、今月中には収穫を終えましょう。

◆さといも

中生種の収穫期となります。「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としては使

用を避けてください。

◆ほうれんそう

加工用では厳寒期に収穫する作型の播種期となります。地力の高い排水の良いほ場を好むので、良い条件のほ場を選定します。また、除草剤を利用する際に土壌が乾燥した状態では効果が劣る場合があります。播種後適度なかん水を行い、適湿の状態ですら除草剤は散布します。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行いましょ。最近では、収穫後の秋枝の発生によって、翌年の花の減少がみられますので、発芽が見られなくなる10月中旬以降に実施しましょ。また、窒素成分の葉面散布は樹勢回復に効果が高いので、5～7日間隔で3回以上行いましょ。

今年は園地や樹によって結果量にばらつきがあります。結果量が少なかった樹では、翌春の着花量が多くなり、隔年結果が激しくなります。10月中旬頃から夏秋梢の整理を行い、翌年の着花数を調整しましょ。

◆完熟きんかん

今年は7月中旬の花が結果した園が多く見られ、平年よりも果実肥大が遅れています。中山間地域では上旬に、沿海地域でも中旬にはビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は外気温よりも3℃程度高い温度で加温することで、果実肥大を確保しましょ。

◆マンゴー

今年は日照不足で、枝の緑化が遅れている園地が多く見られます。十分なかん水を行いながら日照を確保し、夜間は20℃で加温することで、緑化を促進しましょ。

第二新梢がすでに緑化した園地では、日照を十分に確保しながら、施設を開放し、できるだけ外気温に近づけるように管理し、かん水は少なめにしましょ。第三新梢が発生した園地では、緑化不足により、花芽の着生が悪くなりますので、上、中旬に新葉や新梢の除去を行いましょ。

樹冠内に残る枯れ枝や切り口に発生する黒色の胞子が軸腐病の原因となります。加温が始まるまでに枯れ枝を全て取り除き、胞子の発生した切り口を切り戻して、ゆ合剤を塗布しましょ。

2 落葉果樹

◆礼肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花結実が悪くなります。根が活発に活動している10月に施肥を行いましょう。

◆くり

収穫後のイガは、実腐病、モモノゴマダラノメイガ等の越冬場所となり、翌年の発生源となるので、土中に埋めるなど処分しましょう。

(山口和典)

花き

◆花き全般

10月に入ると夜温が低下してきます。特に中山間地域では急激に低下し、降霜の恐れもあります。病害防除の観点からも微生物農薬のダクト散布が実施できるように保温・加温の準備を早めに行ってください。

◆キク

秋ギクの主力品種である「神馬」は、10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延をおこす危険性があります。特に10月以降に定植する作型については、定植直後から低温に遭遇する恐れがありますので、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

「神馬」は系統によって生育ステージ毎の適正な管理温度が異なりますので、栽培する系統に適した温度管理を確認しましょう。

導入から数年経過している蛍光灯については、光量不足になる恐れがありますので、毎年光量を確認し、適切な花芽分化抑制を行いましょう。

◆スイートピー

今月中下旬に発蕾・開花が始まります。草勢が弱い状態で開花・収穫を行うと草勢が著しく低下し、減収の原因になります。中旬までに、収穫に耐えられる株づくりを行い、収穫開始は葉の大きさなどから判断を行って下さい。

曇天後の強日射や高温による生長点の焼け等、気象の大幅な変動による障害が発生しやすい時期になりますので、根域を十分に確保するとともに光線管理等に気を配りましょう。

◆デルフィニウム

中山間地では8月定植分の本格的な収穫が始まります。極端にかん水を控えると花のボリュームが低下し、2番花の萌芽に影響しますので、適宜かん水

や液肥の施用を行いましょう。適期の切り前で収穫し、収穫後の前処理は品質保持剤の濃度、処理時間を厳守し、花落ちのない切り花を出荷しまししょう。

平坦地の9月定植分については中旬頃に発蕾が始まります。ボリュームを確保するためにかん水・追肥等適切な肥培管理を行って下さい。

◆トルコギキョウ

生育初期に乾燥状態になると活着・発根が悪くなり切り花のボリュームが低下するので、十分にかん水しまししょう。心つぶれや葉先枯れの発生しやすい品種については根系の発達を促すため、草丈が10cm前後の頃にかん水を控え、根系の発達を促します。

追肥が後半にずれ込むとブラスチングの発生につながりますので、初期重点の追肥になるように液肥を施します。

また、今月に定植する作型では、活着を確認したら、光線不足により生育が遅れないようすみやかに遮光ネットを除去して下さい。

(中村 広)

畜産

◆家畜

残暑も落ち着き、家畜にとって過ごしやすい季節になりました。朝夕の寒暖差が大きいため、子牛、子豚、幼雛は換気と保温に注意します。敷料が濡れたままだと、畜体の腹部が冷え下痢を発症しますので、乾いた敷料をこまめに取り替えるなどして下さい。

乳牛に関しては、10月に入っても暑熱のストレスを受けています。過去の気象庁のデータから、乳牛が暑熱ストレス域を抜ける時期は、沿岸部で10月下旬～11月初旬、中山間部で10月中旬～下旬と考えられます。酪農家に配布したヒートストレスメーターの温湿度指数が67（ヒートストレスメーターの黄色い部分）を下回るまで、牛舎ファンを回すなどの暑熱対策を続けまししょう。

養鶏では冬場の鳥インフルエンザに備え、今からできる限りの準備をしておきまししょう。鶏舎では防鳥ネットの破れや隙間がないよう点検を行います。鶏舎周辺の石灰消毒に加え、農場に入場する人、物資、車両の消毒を行い、また農場に入る際は衣類、長靴を交換するなど、農場へウイルスが入らないよう防疫を徹底して下さい。

◆飼料作物

配合飼料価格については依然として高止まりし、最近になり上昇傾向にあります。今後急騰することも考えられますので、良質な自給飼料の確保に努めまししょう。稲ワラの収集や水田裏作でのイタリアンライグラスやエン麦の作付け拡

大を行います。圃場の土壌分析を行い適正な施肥に努めて下さい。その際、たい肥を有効に活用し化成肥料の使用を抑え、低コスト栽培に努めるようにしましょう。

飼料イネの普通期栽培については、ホールクroppサイレージの収穫時期を迎えます。脱粒に注意し、適正水分60-65%に予乾させ、すみやかにロール・ラッピングします。飼料稲は茎の中が空洞で空気が入っています。サイレージ化するとき茎の細断と空気抜きを十分行ってください。乳酸菌を添加するとより良質なサイレージを調整することができます。土壌の混入は、品質の低下を招くばかりでなく、カビの発生にもつながります。雨上がりなど土壌がぬかるんでいるときの作業はさけ、またロールを落とす場所にブルーシートを敷くなどして、土壌の混入をできるだけ少なくしましょう。

(須崎 哲也)

特用作物

◆茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて、芽揃いが良く摘採が三日程度早くなる反面、冬期の凍害や晩霜害を受けやすいため、茶園の立地条件や栽培品種等を考慮して実施します。

① 整枝の時期

秋整枝は、平均気温が18～19度以下になる頃を目安に行い、山間地域は9月下旬～10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃となります。

近年は、秋冬期の高温の影響で、秋整枝後に再萌芽する場合がありますが、30cm四方内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響はないとされていますので、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足を招かないように注意しましょう。

② 整枝の深さ

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から3～5節上で、葉層を8節以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一、二節高い位置で実施します。

2 病害虫の防除

近年、暖冬や少雨に伴い、クワシロカイガラムシの第四世代の発生や、カン

ザワハダニが多発生する茶園がみられます。

クワシロカイガラムシの第四世代幼虫のふ化状況を確認した上で、発生が多い場合は防除を実施します。また、カンザワハダニに対しても、冬期防除を実施し、越冬密度の低下を図ります。

(佐藤邦彦)

◆しいたけ

1 ほだ木の水分管理

9～10月は、原基の形成が盛んになる時期です。この頃の原基づくりが春子の発生量に大きく影響しますので、ほだ木の水分補給に努めましょう。

2 ほだ場の環境整備

しいたけ発生量の増大や品質向上のため、ほだ場の環境整備を行います。暗くなったほだ場は間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にしましょう。また、風の強いほだ場や乾燥しやすいほだ場は、きのこの変形や発生不良を起こすので、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

3 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域であっても、その年の気象条件や立地条件（日照、標高等）によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(小田 三保)

◆葉たばこ

今年の南九州リーフセンターでの葉たばこの買入れが来月で終了となります。出荷まで適切な貯蔵管理を行うようお願いします。

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 来年作の準備として、日当たり・風通し・排水の良いほ地を早期に選定しましょう。新作地、借地については、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施して来年作の施肥設計の参考にしましょう。

2 土壌病害対策のため、深耕、耕耘を繰り返し行い、菌密度の低下を図るため耕種的防除に努めましょう。夏期・冬期の深耕、耕耘作業は菌密度低下の為の重要な作業です。

3 良質堆肥10㎡当1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を十分に確保し、未熟堆肥投入を防ぐため、定期的に切り返しを行い腐熟促進に努めましょう。

切り返しは適度な水分状態（50%～55%程度）を保ちながら月1回程度実施して下さい。

4 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫、作業場の整理整頓・掃除機による清掃を行いましょう。

（松元 貴光）

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

なになに農業アラカルト

施設野菜・花きの病害対策



施設で栽培する野菜や花き類の定植シーズンが終わろうとしています。これから先は、収穫に向けて作物の生育が進む一方で、日長は短く気温は下がっていきます。ビニルハウスなどの施設では、施設側面のビニルを閉めきったり、多層・多重被覆などを行って保温対策を強化する時期に入ってきています。

10月8日は二十四節気の寒露（かんろ）ですが、このころには一度短い寒波が来るといわれます。湿度が高くなるとともに、大きな温度差が植物にストレスを与えることから、病害の最初の注意時期といえます。10月23日の霜降（そうこう）のころからは低温に備えて本格的に多重・多重被覆を行うこととなりますが、暖房機が稼働しないか、稼働しても時間が短いことの多い10～11月は、最も病気の発生に注意が必要です。また、11月末ごろから「さざんか梅雨」といわれる季節の変わり目の連続した雨が降りますので、週間天気予報等に注意して、施設が病害の発生に好適な環境になりそうなときには適切な予防を行うことが必要です。暖房機の4段サーモやモヤコン、循環扇などを活用して、湿った空気が滞留しないように定期的を送風することは、病害対策として有効です。



農業用の被覆資材には、防霧効果や防滴効果が付与された病害防除に有効なものがあります。しかし、これらの効果は再利用を繰り返すことで失われることがありますので、もし栽培の途中で、結露や霧が多いと気付いたときには、例年よりも病害対策に注意して適切な病害対策を行いましょう。

近年は、アザミウマ類やコナジラミ類など、薬剤の効果が低く防除が難しい害虫が増えています。また、サイドの内ビニルを設置すると、外ビニルとの間に雑草が生えてきても、なかかな対策が行えなくなります。害虫類やウイルスの発生源とならないよう、施設内の雑草対策は必ず行ってください。

(黒木修一)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫	並	幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	今年は梅雨明けが遅く、またその後の天候も不安定であったため、太陽熱消毒を実施したほ場においては効果不足が懸念されるので、必要に応じ薬剤防除を行います。
トマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	いずれのウイルスも、微小昆虫（タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマ）によって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を防止します。これらの微小昆虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。 ミナミキイロアザミウマが媒介する黄化えそ病(MYSV)が、一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、現在未発生の地域でも注意が必要です。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)	— —	
いちご	炭疽病※、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、苗からの持ち込みにより、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後に多発するため、定植前に防除を徹底し、本ぼに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	やや多	生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期（寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭）に防除します。 収穫前の早生みかん等では収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発現防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は注意報を公表しています。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki です。</p>			